
魔法少女の朝

ハイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女の朝

【Zコード】

Z9798F

【作者名】

ハイル

【あらすじ】

あらすじとして語るほどは特にない。 しいて上げるなら前回「魔
法少女の憂鬱」の続編。 読んで無くとも読める、かも知れません。
読めなくとも知りません。

・これは夢だらうか……

幼い私と父親が田の前にいる

「我が子よ、男は強くなればいけない。
そして常に男らしく生きてゆくべきなのだ。解るか?」

目線を幼い私の目線に合わせてそのまま頭に手をのせてくる

「うん、おとうさん」

そういうて笑う幼い私。

- 隨分懐かしい話だ。父親は私が10歳の頃にいなくなってしまった。

何があつたのか、私はその頃の記憶が思い出せない。
だから父親がいなくなってしまった理由は全く判らないが、まあ知
らなくて良かつたのではないかと今思つた

幼い私の返事を聞いて笑顔をつくり、頭にのせた手でクシャクシャ
と髪を触る。

「そうだ、常に男は強くなればいけない。だから寂しくたつて泣
いては駄目だ。」

・ああ、こんな父親だつた、そしてあまりに馬鹿馬鹿しい。
そして、いなくなつた理由を思い出した。

「俺から強くなれる魔法を一つかけておく。キリは必ず強くなれるんだから。」

そう言つて向かづきづきとつぶやき出した。

・そう、この魔法をかけられて、私は全てを忘れたのだ。

魔法にかけられ意識を失い倒れる幼い私。
ソレを優しく支えてそのまま寝かす父親。

「じゃあ、行つてくるよ。必ず帰つてくる。」

そういうて幼い私に背を向けて何処かへ行こうとする父親。

その手にはやたらと派手派手しいピンクのステッキ。

その格好はやたらと派手派手しいピンクのドレス。

その要望はやたらと派手派手しい魔法少女に見える。

そう父親は魔法少女だったのです。

- - - - - - - - - -

「”だつたのです”じゃねえですか……なんやね——ん——ん——！」

そういうて関西風なツツコミの雄たけびを上げ、フトンから飛び起きる私。

「今凄かった！凄い悪夢見たよー恐怖の片鱗を見たよーー！」

呼び続ける私に相棒の緑色の球体形状の生物なまものであるマリモが話しかけてきた

「ええー……いきなり何なのさ?まだ朝早いんだけど」

寝起きながら少し呆けた顔をしているようだ。

「父親、ステッキ持った、同じ、全身びんぐ、魔法使う、ドレス、女の子、私

興奮した私は情報を整理しきれず口言になる私。

それに対し、眉をひそめて困った顔のマリモ。

「全然理解できなんだけど、父親は女の子ドキリサセたいと思つよ~。」「うわ~」

「そう、何を言つているか解らないが私にも理解できない。頭がどうにかなりそうだ。」

「イヤ何だか本当によく解らないんだけど朝から騒ぐのはよくないと思つよ~。」

父親が魔法少女、多感なお年頃の10歳児には衝撃的じゃないのか。何故笑顔で父親に返事するんだ幼い私。ツツミ所満載じゃないか。お前の格好が一番男らしくないって。断言できるつて。あとその格好でドコに行くんだと問いたい、問いたい、聞こづめたい、子一時間(略)

「なあ、やうは思わないか、マリモ?」

思考の中でツツミを入れてたら少し落ち着いてきた私は、マリモに同意を求めてみた。

「何が?ツツミと一緒にいると何かと聞き返す事が多くなって嫌なんなにせら不満を言わされたので反論してみる。

「だけど?」

「私は同意を求めただけだ。何故ソレが解らないんだマリモ。馬鹿なのかマリモ。どうなんだマリモ」

かなりウンザリした顔をした後、顔をしかめるマリモ。

「何に同意を求めてるか解らないからイヤなんだけどね。あと僕はマリモって名前じゃないよ。」

「そりがマリモ、解つてもうえないのは残念だ。そしてまことに残念ですが貴方はマリモなのでそれ以外の名前など認めませんので。」

本当に心底嫌そうな顔をした後ため息をつくマリモ。

「ああ、なんでこんな人と組んじゃったんだろうボク。」

「嗚呼可愛そうなマリモ。という事で朝のやり取りは終わりですよ。朝の支度を終わらして会社に行かないとね」

気持ちを切り替えて朝の準備をしよう。今日も仕事が待っている。私は長くなっている金色な髪をツインテールにし、フトンをかたす。枕元においてあった、やたら派手派手しいピンクのステッキを取り。

「なあ、マリモ。これ捨ててていい?」

何気なくマリモに聞いてみる。

「絶対駄目だよ。魔法少女には絶対必要なものでしょ?」

今日も駄目らしい。いつか必ず捨ててやる。

頑張れ山本、負けるな2代目魔法少女。

そして今日も山本真助（男性）22歳は会社に向かう。やたらと美女な見た目で。

「せめて元の姿に戻れたなら全く問題なかつたんだけどな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9798f/>

魔法少女の朝

2011年1月2日14時11分発行